

大地

第 33 号
2010. 1. 15. 発行
浄 國 寺
上越市寺町3-14-10
☎025-523-5724

《俳句》

山崎 睦

迫り来る師走の庭の掃き納め
 黄身の色殊鮮やか寒卵
 熱々の鱈の粕汁背に浸みぬ
 目出度きは九十四の初参り
 藪椿雪に紅置き花盛り
 小鳥来てまた小鳥来て実南天
 日射得て氷柱しきりと軒離る
 裸木となりたる庭の明るさも
 根深汁朝の精気をいただきぬ

時を刻む旅

山崎 隆昌

明けましておめでとうございます。
 新しい年が皆様のうえに実り豊かな年であり
 ますように。
 本年もよろしくお願い致します。
 今年の賀状に、種田山頭火の次の句を引用
 記しました。

この道や いくたりゆきし われはけふゆく

山頭火は、生涯旅を住処とし、放浪行乞の生
 活を送りました。引用の句は、山頭火が命終
 する十年前に詠まれたものです。旅にあって
 これから自ら歩もうとする目前の道に寄せる
 強い心を想います。

旅という言葉の持つ響きは、旅行のそれと
 は違います。旅は両の足で、自らの歩みを進
 め、足跡を大地に刻み続けるのです。現代は、
 旅をすることは不可能に近くなりました。飛
 行機や、新幹線、高速道路等により組み立て
 られる旅行です。

しばしば人の一生は旅に譬えられます。
 人は、自らの両の手足、心身の全体を使い
 与えられた時を刻む旅を続けるのです。人生
 の旅には、悩み、苦しみ、喜び、悲しみ、そ

して様々な大切な出会いがあります。
 とところで、近年のITによる生活の変化は、
 人々の時を刻む旅を、これまでの旅スタイル
 から旅行スタイルに大きく変えました。

自らの人生(時の刻み)が「パソコンパッ
 ケージ旅行」「携帯電話ツアー旅行」や「テ
 レビ激安買い物旅行」等に変わり、否応無し
 に「旅行」を続けている姿が見えてきます。

最近では、人生の旅を、勝ち組、負け組と表現
 する。とても嫌な感じですが。むろんパソコン
 や携帯電話を否定するものではありません。

大切なことは、パソコン等に関わることも
 含め「人生を旅する自分」と向き合い続ける
 ことであると思うのです。

まさに「いくたりゆきし われはけふゆく」
 です。人生の旅人として。

「仏性未来」という教えがあります。自分な
 りに意識すれば「仏教の本質は、人々が現世
 の世界(穢土)を離れ、未来の世界(浄土)

に往生することにある」となるのででしょう。
 未来は私たちの人生の旅の帰着するところ
 山頭火の句と仏性未来の言葉を合わせるとき
 不思議になります。

二〇一〇年は雪の正月で始まりました。
 山頭火の雪の句二つ

雪ふる 一人一人ゆく
 雪あかりの、すこやかな呼吸



うけつぐもの

宮崎眞也子

毎年師走が近づくと、行く年来る年にさまざまな思いをめぐらせる。今年、いつもに増してその感慨が深いのは、自分の人生がそうした季節を迎えているためなのだろうか。

約半年前、私は研修で上京した。夏らしい日の少なかった今年、最高の猛暑といわれた日で、地下鉄を降りて地上に出ると、熱風が足を吹きぬけるようだった。私は日傘を広げ会場に急いだ。千駄ヶ谷にある野口英世記念館—— 思ひ出深い場所である。二十年程前の夏にも、実は同じ会場で研修を受けたことがあったのである。その時二人の幼い娘を実家に預けたいとお願いしたところ、両親はそれを喜んで引き受けてくれたのだった。会場まで私を見送り、娘達に「お留守番」を納得させた後、都内の幾つかのスポットを回る予定を父が考えていた。その日もちょうど千駄ヶ谷駅から会場まで同じ夏の道を歩いたことを思い出す。娘達ははしゃぎながらスキップしていた。その様子を見守りながら、傍を歩いていた父がふと「このあたりだったんだよね、僕の家は」と呟くのが聞こえた。母が「あら——と振り向き、二人は周囲を見渡しながらか立ち止まって、何か話しているよう

だった。私はほとんど先へ行ってしまう娘達を追いかけ、その会話を聞くことができなかった。……。

父の生家が千駄ヶ谷にあり、空襲で焼失したことは知っていた。貴重品を預けていた神奈川県平塚市の借家も空襲に遭い、学生の身分にはそぐわないほどの歌舞伎や文楽に関する父の自慢のコレクションも全て灰になったと聞いたことがある。それどころか、父の家は戦争によって、さらに悲しい傷を負っていた。父のたったひとりの兄が亡くなったのである。この伯父は、祖父の願いを入れて好きなフランス文学の道を諦め、役人となるべく経済学部に入ったと聞いた。正反対に次男坊の気楽さから演劇や国文学に傾倒し、私学に学ぼうとした父は祖父から勘当寸前になった。その時、祖父の望みは長男である自分が叶えるから、父には自由に学ばせてあげてほしいと庇ってくれたのは伯父だった。しかし伯父自身は学徒出陣で出征し、京城で戦病死してしまった。祖父は伝手があって飛行機で京城入りし、伯父の臨終に立ち会っている。帰国の船上で祖父は、伯父の遺骨と共にそのまま海に身を投げたかっただという。祖父の胸中も察するに余りあるが、それを聞いた父の思いはどんなにつらかっただろう——。

時が流れ、孫と共に生家近くを歩くことになった巡り合わせを、あの夏の日の父は深く

受けとめていたのかもしれない。だが、多くを語らないまま、その父も十年以上に亡くなった。晩年、父は伯父の名を筆名にしていた。そうしたことにこめられた気持ちをもつとやさしく聴いてあげるべきだった……。

今年また同じ場所で研修する偶然を、私は目に見えない力が働いているように思った。昼休み、時間の余裕があって、ふと外に出てみた。相変わらずの暑さだったが朝よりも風があった。蝉しぐれの下を歩いていくと、歩道の隅の電柱に付けられている番地表示が目に入った。「千駄ヶ谷一丁目」「千駄ヶ谷三丁目」その時、父の保存していた古い戸籍に当時の表記で「渋谷区千駄ヶ谷五丁目」と書かれていたことを思い出した。息が止まるようだった。「五」を捜して足を早めたが不思議なことにそこでわからなくなってしまう。次の電柱はもう「六丁目」だったのである。昼休みの終わりも近い。これは宿題だと感じた。そして、もと来た方へ戻りかけた時である。道路を隔てた反対側の茂みにふと目を向けると、そこに「神宮外苑入口」の案内板があることに気づいた。はっとした。父の生家と学徒出陣が行われた国立競技場の距離的近さが、この時初めて頭の中で結びついた。父は学徒出陣の行進を観覧席で見守っていたのである。

私は一瞬、伸びあがるようにして茂みの奥

を眺めた。舗道の照り返しのせい、そこだけ、けがゆらゆらと曇気楼のように揺れていた。その向こうから、思いを残したまま去って行った人たちが語りかけてくるような気がした。静かに耳を傾け考え続けることが、改めて大切な宿題に思えた。それを少しでも手がけることが、新しい年の、そして私のこれから

常忘れゐて

山崎隆昌



昨夏、お盆時期、不覚にも負傷し動けなくなった。左足小指部の骨にひびが入ったのだ。事の次第は以下のとおりである。

八月十日の深夜、いわゆる丑三時に、私の枕元のインターフォンが突然鳴りだした。へピンポン、ピンポン、ピンポン。階下の母からの緊急呼び出しだ。

母には心臓疾患があり、さらに腸閉塞も時に発症するため、簡便なインターフォンを購入し私のベッド枕元にセットしてあるのだ。

それ一大事、私は反射的に自室を飛び出し、階段を駆け降り、中の座敷を突っ切り、母の部屋に直行した。ところが何も異状なし。

母「夜中にどうしたの？」
私「だってピンポン鳴らしたでしょ！」

母はげげんな顔で枕元の呼出しボタンの方を見て、済まなそうに言うのだった。

母「ああ、ボトルだね。置いた時に当たったんだね。それは済まないね」

何のことはない、夜中にペットボトルの水を飲み、元に戻そうとしたところ、ボトルの底が呼び出しボタンに触れたらしい。

ホッとするやら、腹が立つやら、眠気は戻ってくるし、もやもやとした気持ちで再び部屋に戻りベッドに潜り込んだ。

朝起きると左足先（小指の付け根）が痛む。その原因が判らない。どうも母の部屋に行く途中の真つ暗な座敷で何かに思いきりぶついたらしい。憎き敵はスタンド型扇風機。そう夜中に扇風機と相撲を取ったのだった。

八月十日、十一日は足を引きずりながら何とか過ごしたが、八月十二日になると患部が赤く腫れ、痛みも増して動けない。家人に言われ、嫌々ながら近所の整形外科に受診した。結果は小指の骨のひび入り、安静せよ！

それから三日間、ベッドでおとなしく静養。わずか三日の休みだが、時期が時期だけに、家族には大変な苦勞をかけ、周りに随分迷惑をおかけした。とりわけ、お盆に来寺された皆様には申し訳ないことだったと思う。

都合三週間ほど左足を引きずりながらの生活が続いたが、大事にならず済んだ。今更ながら、我が肉体の出来の良さに感謝している。

私は六十五歳、これから年を重ねることに、事故や病気をさらに多く抱えることになる。しかし、老眼鏡を掛け、耳が遠くなりながら、普段は老化した自分を忘れ、老化などまだ他人事のように思っている私である。

生涯を病に苦しめられた吉野秀雄の歌にうつし身の生死の大事つくづく

病めば身に知れ常忘れゐて

この度の負傷は、若い時から今まで医者知らずで、病める自分を「常忘れゐる」私に對し「自らの姿に目を向けよ」という警鐘かもしれぬ。

「生死の大事つくづく」との表現は少し重すぎるが、今という時を刻む自分に目を向け自らを大切にしたいと思う。

〔九十四の齢になれば〕

母は週三回デイサービス。通所日の朝は体温を測る。ところが、寒がりとはいえずね着七枚である。容易に体温が測れない。

私「何枚きてるの、僕なんか三枚だよ！」

母「そう言うけどね、あんただって九十四の齢になれば解るわね」

私「そう言ったら、何も言えないけども」

母「九十四歳は、大変だわね」（ニヤリ）

その後、母は自己防衛手段として「九十四の齢になれば」を笑いながら使用する。

（隆昌記）

イスラエル集団農場

(キブツ)の友へ

山形県遊佐町 入江伸幸

この夏私は今は亡き我が友『桜井乙彦七回忌追悼の集い』に出席のため上京しました。彼はガンのため弱冠五十八歳で他界してしまいました。

思い出せば、彼との始まりは私が高校一年の三月（昭和三十八年）から。それは新聞で山形県からの東大合格者三名の中に、桜井乙彦の名前を見つけたことからです。

桜井という姓は上品だと思っておりますが、私の当時の同級生にどことなくドン臭い桜井君がおりまして、つい連想してしまうのです。

名前の乙は甲の次ぎ、彦については、いわゆる彦左衛門の彦、なんとも変な名前と思っただ次第。しかしその事により彼の名を覚えられたのだから面白いものです。

さらに、その一年前の同じ高校一年の春に、軟式テニスのインターハイ県予選が酒田市で開催され桜井組も参加、しかし不運にも第一シードの酒田東校（我が母校）中村・菅原組と対戦し、あえなく敗戦となりました。当時私はこの試合をたまたま観ていたのです。

一九七〇年（昭和四十五年）人類は初めて月に到着しました。

この年の春、私たちは男子十四名、女子五名で、イスラエルの集団農場（キブツ）での体験学習に向かったのです。

キブツの体験学習は、集団教育、あるいは農業の集団化等について、各人の目的がありました。東大で経済学を学んだ桜井君にとつて、お金の無い世界への挑戦（キブツでは原始共産主義で貨幣は原則的に不要）は、興味ある世界でした。

彼とは同郷と言うこともあり、馬が合い大いに語り合い、前述のテニスのことも知り得たのです。

さて『追悼の集い』では、米沢興譲館高校同級生の代表は、彼に将来の米沢市長への期待を語り、東大時代の代表は、ゼミでのまとめ役の活躍、さらに卒業後は日本経済新聞社の記者として、とりわけドキュメント書籍の『総合商社安宅産業の崩壊』の共同出版は特筆すべきものであることが話されました。

さて、われらキブツの仲間の代表は、同室であった村上が、彼のキブツでの生活を紹介なかでも、彼が毎日のように母親に便りをしていたといった事が披露されました。

各グループごとのスピーチは、桜井君の面影を思い出させ偲ぶに十分なものでした。

キブツの仲間は日本中から集まってきた若人で、私のかげがえのない友人でした。

一九七七年（昭和五十二年）、二十八歳の

とき丹波で一家もろともに雪崩の事故で亡くなった山口。彼はコミュニケーション、農業に興味を持ち少しの田畑を耕しながらの田舎生活。なんと痛ましい事故か！

帰国後は小田原で小学校の教師をしていた内藤。彼はキブツでの私の同室者、二〇〇五年にガンのため五十七歳で他界。校長タイプではないが、あいつの周りにはいつも子供たちが楽しく語り合いをしていたことが、いつまでも私の頭から離れません。

私には中学、高校、大学時代の友人は多い。でも、このキブツ時代の友人たちは特別な意味をもつ。

二十台前半、人生について、社会について、世界について多くを語り、共に行動したことを通しての青春でした。

私のかげがえの無い友よ。残念であろう。それぞれの人生が途中で終わってしまったことを！

私ほもっとも君たちと語り合いたかった。私も残念無念です。

寄る年波は防ぎようも無いが、気持ちだけは君たち三人分も頑張って生きて行こうと思っ

ているのです。どうか見守っていてください。

二〇〇九年 九月十七日

合掌

眠り　　羊が一匹、羊が二匹

山崎慎子

まさか、この私が不眠に陥ることがあるうとは、全く思いも寄らぬことだった。

幼い頃からよく眠る子供だった。

小学校三年生の頃二キロ程離れた小学校が火災に遭い燃えてしまったことがあった。

真夜中の火事で、上を下への大騒ぎ、サイレンや半鐘が鳴り続けていたというのだが、その大騒音の最中にも私は眠り続け、笑われたり呆れられたりした。

また京都での学生時代、遊びに行った先輩や友人の下宿に泊ってしまうことも再三のことだったが、しばらく経って「おばちゃん」と呼ばれていた二年先輩に「アンタを泊めるのなんわ」と言われたことがある。友達が寄ればお喋りはしばしば夜中に及ぶ。当然寝不足である。つまり寝不足で不機嫌の私に手を焼いたという訳である。

極め付けは、長男の出産を控えていた頃のこと。それまで親子三人関西で暮らしていた私たちは、長男の誕生を機に、お寺に帰ることに決めた。夫は仕事の都合もあり、少し関西に残ることにして、娘と私は二人で先に高田に帰って来ていた。

その頃の我が家は部屋数も少なかったので

私達は“寝間”と呼ばれていた九畳の細長い部屋に、義母と三人で寝ることに決めた。まだ大きいおばあちゃんも健在で、本堂の方には、大きいおばあちゃん、その近くの部屋に義父が寝ていた。

ある夜半、娘が泣き出した時の事、おムツが濡れていたのか、あるいはお乳が欲しかったのか、先に泣き声に目覚めたのは義母だった（そうである）。

ところが母親たる私は一向に気付く気配がない。たまりかねた母が「しずこさん、しずこさん、ほらマコちゃんが泣いているでしょ」と声をかけた（そうである）

呼べども呼べども眠ったままの私は、手を払いのけるしぐさをしながら「うるさい！」と一喝した（そうである）

後刻その話を聞かされた私は、哑然、呆然、こういふ「ヨメ」と四十年も暮らしてくれた義母は、それだけでもすごい偉いと改めて思う。

お姑さんをふっとばしてしまふ程、眠りをこよなくいとむ私が、五十歳を過ぎた頃、ひどい不眠に陥ったのである。

なかなか寝付くことができない。寝付いても直に目覚めてしまう。朝までその繰り返し。「羊が一匹、羊が二匹」と唱えても全く効き目がない。

ならば、昼間の空いた時間に昼寝を、と思っ

ても神経が妙に高ぶっているばかりで、頭が冴え目も冴えて眠ることができない。

それまでは寸暇を惜しんで上手く眠ることができたのに、である。

ついにギブアップして、主治医に誘眠剤を処方して頂いた。

その時の不眠は二カ月程続いてしまったが、しだいに誘眠剤の常習への不安が頭をもたげ始めた。つまり不眠も快方に向かっていたということなのだろう。誘眠剤を止め、やがて以前の眠りを取り戻すことができた。

でも、これは多分に年のせいもあると自分では納得しているのだが、その後、時折眠れないサイクルにすっぽりはまってしまうことがある。

「あーまたおいでなすったか。迷惑な！」と思いつつ、不眠の嵐が去るまで、いかにすれば上手く眠れるか試行錯誤を重ねるのである。今でも寝不足が一番辛い。それは必ずしも睡眠時間とは一致しないというところがやっかいで、自分自身の眠りの充足感がないと、どうも心身ともにシャッキリしない。そして逆に十分に質の良い眠りに満たされた時の爽快感は堪らない。

普通に眠られることの有り難さ。眠られぬ夜の悶々とした辛さ。眠り上手の私が、不眠を知ることになるとは思いも寄らぬことだった。

食いしん坊のワン公達



山崎慎子

我が家のワン公二匹、蓮と華は、かなりの大食漢である。常に気をつけていないと、たちまち肥満に陥ってしまうだろうことは、もはや疑いのないところだ。およそ人間の食べべているものなら、与えれば恐らく何でも食べべしてしまうだろう。

蓮は現在九・八kg、華は七kg。

蓮は体質もあり少々肥満傾向だが、この正月帰省した子供達に「アレ、華も太ったぞ！」といわれて内心慌ててしまった。

餌は人間並に三回、お皿にお湯でふやかしたフードを与え、おやつは無し。たまに与えるのは、決められた量からあらかじめ取り分けたフードか大根かキュウリを刻んだもののみ。

体内時計がしっかり作動して、ご飯時が来ると二匹が催促するサマはすさまじい。手当たり次第に部屋内の扉を両足でガリガリかいてアピルする。地鳴りのようなその音に、居合わせたお客様は目を泳がせて「地震ですか？」と驚く程だ。

二匹とも一日の食餌量は百g余り。恐らく一kgを与えれば、倒れても食べ続けるであろう食いしん坊のワン公達である。

浄國寺同朋会 一こ縁の場

山崎慎子

毎月一回、日曜日の朝八時をまわる頃、本堂に十余名の人達がお参りにみえます。

八時半、集まった人全員で講師である保倉謙雄師について、「帰命無量寿如来」と『正信偈』を読みます。

「浄國寺同朋会」という名の会です。

この会は始まってから早いもので十年以上経ちました。会が産まれたきっかけは、北城町の今は亡き金井信一さんの一言でした。

金井さんはその頃、高田別院を会場に行われていた推進員養成講座を受講なさっておられました。何やら難しい名前ですが、私たちの宗祖である親鸞聖人の説いて下さった浄土真宗を学んでいたのです。

二年間をかけて、八回程の講座がもたれ、その七回目位に京都の東本願寺（本山）で二泊三日でお話を聞くのです。

お寺の集まりでは大抵、はじめに『正信偈』を読みますが、他の寺の人達は慣れた様子なのに、節のこともよく分からないことに気付かれた金井さんが、「浄國寺さんでも何かやってくれませんかねえ」と仰しゃって下さったのです。

私たちも内心では何かやりたいやらなければ

ばとあせるきもちもありながら、もう一方でお父さんが勤めを止めて余裕がきたら、と言いついていたのです。

しかし、もう待って貰う訳にはいかないといい思いもあり、日曜の早朝なら御法事前に何とかできるのではないかと、思い切って始めてみたのです。

最初の何年間は朝七時でしたが、それでも皆さんが都合をつけて集まって来られました。

講師には三和区田村称名寺様の保倉謙雄師にお願いしました。はからずも十年以上続けることができたのは、ご講師の存在が大きいと私たちは思っております。

『正信偈』の指導、法話、そしてその後の茶話会ではオカリナの演奏もして頂いています。皆さんの都合がうまく合った時は、二十数名を超えることもありましたが、大抵は十数名。初めの頃はぎこちなかった茶話会も近頃はざっくばらんに様々なお話がでるようになりました。

十二月には報恩講（納会）で手打ちそばを会食、一月には新年会でおでんをつつきながら、余興など出し物もあり賑やかに楽しんでいきます。

ちなみに、推進員養成講座は真宗講座と名称を変えて継続しており、その都度数人の方が受講。昨年末も六名が京都の本山に行ってお参りました。